

情報社会に参画する態度を培う情報教育の在り方

～連携教育を活かした地域ミニ集会を通して～

1. 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

生活のあらゆる場面で ICT を活用することが当たり前の中となっている。教育現場においても ICT を扱うことが前提となっており、児童生徒が生活や学習、娯楽に活用している様子も身近に感じられるようになってきている。それに伴う問題も多く取り上げられ、情報に関わる知識、技能、モラルが問われる時代になっている。

文部科学省「教育の情報化に関する手引き（令和元年12月）」では、「人工知能（AI）、ビッグデータ、IoT(Internet of Things)、ロボティクス等 の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられ、社会の在り方そのものが劇的に変わる『Society5.0』時代の到来が予想されている。」と表記している。

学校現場では、教育の情報化がますます図られ、環境面（ハード面）が充実してきていると感じる一方、全ての情報を扱う側（ソフト面）が適切に扱えているとは言いにくく、教育をする側も、教育を受ける側も情報に関する認識が発展途上であり、不十分であると考え。そのため、今後一層充実した情報教育が望まれる。知識基盤社会の到来、情報社会の進展、高度な情報技術を持つ IT 人材の需要増大に対応する観点からも、早期に「Society5.0」時代について学び、先を見通した教育を進めることは重要である。それには、学校だけでなく、保護者、地域との連携をし、世代を問わず情報化社会を考えていくことが「Society5.0」時代を生きていく私たちにとって必要なことだと考えた。

(2) 学習指導要領との関わりから

文部科学省「教育の情報化に関する手引き（令和元年12月）」より

【小学校】

・「学習指導要領 総則」において、情報活用能力の育成を図るため、「コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図る」こと、また、「各種の統計資料や新聞、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること」とした。

【中学校】

・「学習指導要領 総則」において、情報活用能力の育成を図るため、「コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図る」こと、また、「各種の統計資料や新聞、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること」とした。

・小学校でプログラミング教育が必修化されたことなどを踏まえ、技術・家庭科（技術分野）「情報の技術」において双方向性のあるコンテンツのプログラミングが追加されるなど内容の充実が図られ、「生活や社会を支える情報の技術」「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題の解決」「計測・制御のプログラミングによる問題の解決」「社会の発展と情報技術」を全ての生徒に履修させることとした。

小学校学習指導要領では

第2章 各教科 第2節 社会 第5学年

内容 (4) 我が国の産業と情報との関わりについて、学習の問題を追究・解決する 活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(イ) 大量の情報や情報通信技術の活用は、様々な産業を発展させ、国民生活を向上させていることを理解すること。

上記のように「教育の情報化に関する手引き」では、「学習指導要領 総則」との関りについて記述している。小学校と中学校共に学習指導要領総則においては「情報活用能力の育成を図る」と明記している。小学校においては、情報教育は各教科に割り当てられているため、特定の教科で行うことを前提としていない。情報社会についての本主題に関する内容が明記されているとするならば、5年生社会科に該当する内容がある。また、中学校においては、情報と社会とのかかわりについても明記しており、下線部については、本主題との関りをもっている。

(3) 情報活用能力について

文部科学省「教育の情報化に関する手引き（令和元年12月）」より

「情報活用能力」とは、「世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力」

としている。そして、

情報活用能力を育成することは、「将来の予測が難しい社会において、情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいくために重要である。」

と記述している。そこで、教育の情報化に関する手引き「2. 情報活用能力の育成に係る『3観点8要素』」での「3観点8要素」において、特に「C情報社会に参画する態度」の「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解」と「望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度」について焦点を当て、情報社会に参画する態度を培う情報教育の在り方について検討するため、本主題を設定した。

(4) 求めたい資質能力について

求めたい資質能力については、文部科学省「教育の情報化に関する手引き（令和元年12月）」より下記のように示されている。

【小学校段階】

C 情報社会に参画する態度

「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解」については、情報発信による他人や社会への影響、情報には誤ったものや危険なものがあること、健康を害するような行動などについて考え、理解させるようにする。

「望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度」については、ネットワークを仲良く使ったり、情報を積極的に共有したりする態度を身に付けさせるようにする。

【中学生段階】

C 情報社会に参画する態度

「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解」については、ネットワーク利用上の責任、基本的なルールや法律の理解と違法な行為による問題、健康を害するような行動などについて考え、理解させるようにする。

「望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度」については、小学校段階で身に付けた情報モラルの基礎の上に、ネットワークをよりよいものにしたたり、新しい文化の創造に寄与したりするといった態度を身に付けさせるようにする。

本研究での求めたい資質能力については、上記の内容を踏まえつつ「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割」について知り、未来の情報社会について予想することで、希望をもって自分の将来のことについて考えることができること、そして主体的で対話的な学びを通し、様々な意見を共有することで「望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度」の育成を、求めたい資質能力とする。

(5) 主題について

「情報社会に参画する態度」とは、情報教育が掲げる目標の1つである。教育の情報化に関する手引きにおいては「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度」としている。

私たち教師が考える情報モラルとは、「情報社会に的確な判断ができない児童生徒を守り、危ない目にあわせない」、すなわち危険回避（情報安全教育）の側面が強い。情報モラルの必要性や情報に対する責任について考えるだけでは、世の中のマイナスイメージをもたせる一面的な学習内容に偏りがちであると考えます。

情報社会に参画する態度については、情報活用能力の「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解」で求められている情報の影に関する情報のモラル（道徳性）だけではなく、未来への希望を描く情報のモラル（意欲）と言えるような活動を行い、情報社会に参画する態度を培いたいと考えた。

そこで、主題における「情報社会に参画する態度」とは、

「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解」について学び、未来の情報社会について予想することで、希望をもって自分の将来のことについて考えることができることととらえ、主体的で対話的な学びを通し、様々な意見を共有することで未来への希望を描く情報のモラル（意欲）をもつことを「望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度」ととらえる。

以上2つの要素を合わせたものを、「情報社会に参画しようとする態度」と本研究では定義づけることとした。

(6) 本学区の実態

今日の課題として、小1プロブレム、中1ギャップ、不登校、長欠児童、特別な配慮を有する児童の対応などがあり、八街市も同様な問題を多く抱え、各学校と市教育委員会が対応している。また、これらの問題の要因の一つに情報に関わるトラブルも多く見られ、これら諸問題に対応するため、かねてより八街市では、幼保小中高連携教育を行ってきた。連携教育では、「1学校改善、2継続指導、3学校・家庭・地域との連携」の3本を掲げ、市全体で取り組んでいる。

八街北中学校区においても幼保小中高連携教育を14年前から深い交流を行い、PTA、地域とも繋がりを日頃より大切に交流を行ってきた。

本研究を進めるにあたり、小学校6年生児童にとって身近な問題である、中学校への進学について問い、半年後の自分について考えたときの心理状態をアンケートで調査した。

事前アンケート (八街市立朝陽小学校 6年児童 74名 令和元年12月実施)

プラスイメージ		マイナスイメージ	
1 中学校での友だちとの交流について			
楽しみ 43人 (58%)	少し楽しみ 22人 (30%)	少し心配 8人 (11%)	心配 1人 (1%)
2 中学校での部活動について			
楽しみ 44人 (59%)	少し楽しみ 17人 (23%)	少し心配 5人 (7%)	心配 8人 (11%)
3 中学校で先輩とのふれあいについて			
楽しみ 19人 (26%)	少し楽しみ 27人 (36%)	少し心配 18人 (24%)	心配 10人 (14%)
4 中学校の授業について			
楽しみ 17人 (23%)	少し楽しみ 28人 (38%)	少し心配 16人 (22%)	心配 13人 (17%)
5 中学校では教科によって教える先生が違うことについて			
楽しみ 23人 (31%)	少し楽しみ 36人 (49%)	少し心配 12人 (16%)	心配 3人 (4%)
6 中間テストや期末テストが集中してあることについて			
楽しみ 7人 (9%)	少し楽しみ 25人 (34%)	少し心配 23人 (31%)	心配 19人 (26%)
7 授業が45分から50分になることについて			
楽しみ 6人 (8%)	少し楽しみ 22人 (30%)	少し心配 23人 (32%)	心配 22人 (30%)

アンケートの結果から、次のことが分かった。設問1では、北中学校区が一小一中であることから、現在の学年がそのまま上がり同じクラスメイトと進学するため、安心して中学校を楽しみにしていることが分かる。少数ながら、不安を抱える児童がいることについては、中学校という環境変化について不安があるのではと考える。

設問2では、中学校から、部活動の紹介などを行っている。そのため、どの部活に入ろうか事前

に決めている児童もあり、楽しみにしていることがわかる。

設問3、設問4、設問5では、中学校という環境変化に対し、少しずつ不安をもっている児童が割合として多くなってきていることが分かる。先生や先輩、学習が難しくなるのではないかなど、現状では聞いたことなどを想像することでしかできない状況に対し、不安をもっている児童もいると考えられる。

特に設問6と設問7については、半数以上がマイナスイメージをもっていることが分かる。自由記述欄では、心配なこととして「授業についていけるかどうか」「勉強のこと」「テストのこと」などが主に心配な理由として挙げられていた。「複雑な漢字が読めるだろうか」「難しく寝てしまうのでは」という回答も見られた。

全体として2割から3割の児童が不安をもって中学に進学しようとしていることがわかった。

(7) 活動内容の作成

アンケートの結果を受け、八街北中学校区（八街市立朝陽小学校と八街市立八街北中学校）の情報・視聴覚教育担当の職員で、どのような連携が図れるのかについて議論した。

子供たちが将来の見通しをもち、どのようにして生きていくべきなのかということを中心に考えられるような授業や活動ができないか検討し、情報活用能力の「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解」で求められている情報の影に関する情報モラルを伝える活動だけではなく、未来への希望を描く情報のモラル（意欲）が芽生えるような活動をしたと考えた。そこから、安心して中学校に進学ができるよう支援するために、未来への希望がもてるような活動を行うこととした。

また、八街市の連携教育における「学校・家庭・地域との連携」から、従来から行われているミニ集会を活用することで、児童生徒の交流、さらには保護者、地域の方々も含めた一体となる活動が可能になると考えた。

そして、主題である情報社会に参画する態度を培う情報教育の在り方について検討し、「『これからの未来について考えてみよう』～ソサエティ5.0の時代を生き抜くために～」を企画した。さらに、保護者地域の代表として小学校PTA会長と中学校PTA会長の協力をもらい、共同で企画を作成した。

2. 研究の目的

連携教育を活かしたミニ集会「これからの未来について考えてみよう」を実践することで、本主題の「情報社会に参画する態度」が培えたかを明らかにする。

3. 研究方法

研究の方法は以下の順で行い、2つの研究視点をもち児童生徒保護者によるアンケート結果と照らし合わせ検討することとした。

(1) 中学校へ向けての事前アンケートの実施（6年生対象）

(2) 地域ミニ集会についての活動内容の作成

(中学校、小学校、小中PTA会長と検討し作成)

(3) 地域ミニ集会の実施

活動実践日 令和2年2月10日(月)

場所 八街市立八街北中学校 体育館

対象 八街市立朝陽小学校 6年児童

八街市立八街北中学校 中学2年生徒

同小学校中学校 PTA(保護者、教師)

テーマ 「これからの未来について考えてみよう」

～ソサエティ5.0の時代を生き抜くために～

(4) まとめ

活動実践のアンケート結果と視点を照らし合わせて検討をし、研究のまとめをする。

4. 研究視点

視点1 「これからの未来について考えてみよう」の活動で、過去から現在の「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割」について知り、未来の情報社会について予想することで、希望をもって自分の将来のことについて考えることができるかどうか。

視点2 保護者、児童、生徒が一体となり行うミニ集会で、主体的で対話的な学びを通し、様々な意見を共有することで、情報のモラル(意欲)が芽生え、「望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度」を培っていたか。

(1) 視点について

「教育の情報化に関する手引き(令和元年12月)」では、小学校「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解」については、情報発信による他人や社会への影響、情報には誤ったものや危険なものがあること、健康を害するような行動などについて考え、理解させるようにする。中学校「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解」については、ネットワーク利用上の責任、基本的なルールや法律の理解と違法な行為による問題、健康を害するような行動などについて考え、理解させるようにしている。







今回行った活動では、手引きに記載されているような、情報モラルや情報社会に関わる「影」の側面について取り扱わなかった。社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割とは、より便利でよりよい世の中にしていくことを前提として発展しているからと考えたからだ。また、PTA会長を交えた話し合いの中で、未来に対して怖がったり、未来に不安をもったりするような子供にしたいくないとの意見が出た。情報教育の在り方として情報モラルが表立ち、示されているが、児童生徒が未来に憧れ、夢をもち、希望をもたせることが情報社会への望ましい参画の在り方の一つであると提案する。

その点を踏まえ、2つの視点について検討し、連携教育を活かしたミニ集会で、情報社会に参画する態度を培うことができたかどうか、活動実践を通し明らかにする。

5. 研究内容

(1) 活動実践

ソサエティ5.0について知らない児童生徒や保護者がほとんど、興味をもって集中して見ていた。

		活動内容	備考
導入	1 0	<p>今日のテーマの確認</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>これからの未来に向けてみんなで考えてみよう</p> </div> <p>1 ソサエティ5.0について知る。 説明→映像(6:20)</p> <p>ソサエティ5.0の感想を聞く 発問:今と比べてどのような変化がありましたか?</p>	 <p>それは、いつもの毎日にやってくる、半歩先の未来。</p> <p>・近くの児童と意見交換をして考える時間を与える。</p>
展開	3 0	<p>2. 過去と現在の比較を試みる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒には答えを言わないようにしてティックトック画像を見せ、保護者に解答させる。 ・大人が答えを言わないようにし、ポケベルの画像を見せて、児童生徒に何か解答させる。 ・児童に、今の電話はってどんなものと聞く。 →スマホ <p>＜ゲームの内容＞ 昔のマリオを見せて回答する。 今のマリオを見せて回答する。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">時代の変化を感じさせる。</p> <p>＜保護者に昔のことを聞く＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔と比べたら今の生活はどう思いますか? ・どんなところが変化していますか?そして便利になっていますか。 	<p>現代の流行っているものスライド、昔の流行りものスライドを出してそれぞれの世代に説明してもらう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>小中学生のみなさんは、大人にばれないようにしましょう!</p>  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>大人のみなさんは、小中学生にばれないようにしましょう!</p>  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">電話ってどうなってますか?</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>20年前</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>現在</p>  </div> </div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">ゲームの変化</p>  </div>

案外知らない児童や保護者も多く、各世代盛り上がりを見せた。

3. グループワーク

今と昔についてカゴテリー別の表をグループで記入する。

	電話	仕事	遊び・勉強	生活
昔				
現在				

記入した表を大人グループと子供グループを比較しながら、トークをする。

- ・子供はこんな遊びをしています、大人の皆さんどう思いますか？
- ・大人は昔こんな仕事したいと思っていますが、子供の皆さんどう思いますか？

いったん席につき、今日のテーマを振り返り、未来を想像して、カゴテリーについて考える

	電話	仕事	遊び・勉強	生活
未来				

記入した表を大人グループと子供グループを比較しながら、トークをする。

- ・大人はこんな職業を考えていますが、子供の皆さんはどう思いますか？
- ・子供はこんな職業があると考えていますが大人の皆さんはどうおもいますか？

・大人世代、子供世代に分かれた4人グループをつくり、想像しながら表を作る。

	電話	将来やりたい仕事	遊び・勉強	生活
20年前	ポケベル 折り畳み携帯	野球選手 サッカー選手 博士・学者	食べ物屋 看護師 お花屋	完全学校週2日制 東京ディズニーシー開園
10年前	折り畳み携帯 (カメラ付き)	サッカー選手 野球選手 博士・学者	食べ物屋 幼稚園の先生 保育士 学校の先生	図書館に一緒に 行く 「はやぶさ」が 地球に帰還。 なでしこジャパ ン優勝
現在	スマホ	サッカー選手 野球選手 博士・学者	食べ物屋 幼稚園の先生 保育士 看護師	家で家で ネット対戦する し！NEMOで雑談 しながら、 一緒に勉強する Youtubeで勉強 タブレットで勉強

昔という表記があいまいなため、保護者世代が小学生ぐらいの時代を考えた。

・書画カメラを利用し、書き終わったグループのワークシートをスクリーンに映し全体で共有する。

・マイクをもって周りの保護者や児童、生徒に聞く（PTA会長マイク担当）

未来という表記があいまいなため、当日は10年後と表記し、未来のことについて考えた。

保護者と児童生徒双方の考えを聞くことで、考え方の違いがよく表れていた。双方の意見の交流を通して、お互いの考えを共有できた。

まとめ

2 4. これからの職業について話をする。
0 ・オックスフォード大学のマイケル A オズボーン准教授の話をもとに将来なくなるであろう職業についてふれる。
・記入した職業はこれからなくなっていくのか、発展していくのか全体に聞く。

・ソサエティ 5. 0 の時代に振り返り、どんな時代が近づいてくるのか確認する。

5. これからみんなはどう生きていくべきか改めて問う。

発問：これからはコンピュータに代わるのであなたたちの夢叶えられませんかと言われたらどう思いますか？→考える時間を与える。

未来のキーワード
「ワクワク・挑戦」

「未来のことはまだわかりませんが、今とは違う未来が必ず来ます。そこで皆さんに未来のキーワードを覚えてもらい、終わりにしたいと思います。ぜひ、未来を楽しみに、そしていろいろなことに挑戦をしてください。」

6. 今日の授業についてのアンケートを記入

アンケート用紙のイメージ。質問事項と記入欄が示されている。



「雇用の未来」 著書

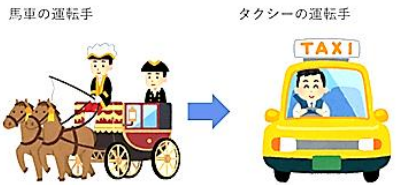
Table with 2 columns: 順位 (Rank), なくなる確率 (Probability of disappearance), 仕事 (Job). It lists various jobs and their predicted disappearance rates.

今後10~20年程度で米国の総雇用の約47%の仕事がコンピュータ化されるリスクが高い



マイケル・A・オズボーン准教授

仕事の変化



2030年の社会と子供たちの未来

文部科学省(中教審)
・社会の変化に受け身で対処するのではなく、自分から向き合って関わること。
・解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解ける力を育てただけは不十分であること。
・自分で判断し、自分で問題を見つけ、その解決を目指し、いろいろな人と協力しながら新たな価値を生み出していくこと。
※一部表記を変更しています。

これから生まれてくるであろう仕事

- A I を作る仕事 (A I 開発)
A I の操作説明する仕事 (A I コンサルタント)
A I と関わる仕事 (販売, 修理など)
A I を活用していく仕事 (営業, 業務支援)

A I のことについて、会場全体が興味をもって聞いていた。A I に対する心配な面や A I に期待する意見などが授業後のアンケートに書かれていた。

6. 研究のまとめ

(1) 事後アンケート

小学生アンケート（当日欠席除く 無回答除く）

肯定的意見		否定的意見	
1 今日のミニ集会の内容はどうでしたか。			
たいへんよい 41人 (58%)	よい 27人 (38%)	あまりよくない 0人 (0%)	よくない 0人 (0%)
2 自分の将来のこと（職業や生活）について考えるきっかけになりましたか。			
できた 26人 (37%)	少しできた 37人 (52%)	あまりできなかった 5人 (7%)	全くできなかった 0人 (0%)
3 小学生と中学生が一緒に行事や授業を行うこと（連携教育）についてはどうですか。			
たいへんよい 26人 (37%)	よい 38人 (54%)	あまりよくない 4人 (5%)	よくない 0人 (0%)

中学生アンケート（当日欠席除く 無回答除く）

肯定的意見		否定的意見	
1 今日のミニ集会の内容はどうでしたか。			
たいへんよい 27人 (34%)	よい 38人 (48%)	あまりよくない 5人 (6%)	よくない 1人 (1%)
2 自分の将来のこと（職業や生活）について考えるきっかけになりましたか。			
できた 28人 (35%)	少しできた 30人 (38%)	あまりできなかった 9人 (11%)	全くできなかった 0人 (0%)
3 小学生と中学生が一緒に行事や授業を行うこと（連携教育）についてはどうですか。			
たいへんよい 23人 (29%)	よい 36人 (46%)	あまりよくない 6人 (7%)	よくない 0人 (0%)

アンケートの結果から、今回行ったミニ集会を行ったことについて、肯定的な意見を回答した児童生徒の割合が多く見られた。特に小学生の肯定的な意見を占める割合は多く、ミニ集会『「これからの未来について考えてみよう」～ソサエティ5.0の時代を生き抜くために～』に関心をもって臨んでいたことが分かる。設問1については、否定的な回答も見られているが、自由記述欄では、否定的な記述については一つも見られなかった。

設問2の将来について考えるきっかけになったかどうかの質問では、多くの児童生徒が肯定的な回答している。中学生においては、1割ほど否定的な意見があり、無回答もあった。

設問3では、小学生については、肯定的な意見が多く見られているが、中学生においても肯定的な回答の割合が多かったことに注目できるであろう。

また自由記述については、資料の通り、肯定的な意見が多く記述されていた。否定的な意見については見られなかったが、中学生のアンケートに一部不適切なものもあった。

(2) 視点の検討

視点1について

「これからの未来について考えてみよう」の活動で、過去から現在の「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割」について知り、未来の情報社会について予想することで、希望をもって自分の将来のことについて考えることができたかどうか。

実践を通し、アンケートの回答や自由記述から、近い未来に向けてイメージを膨らませ、将来について考えるきっかけになったことがうかがえた。活動導入時、活動の様子から多くの児童生徒は、過去や未来についての想像や予想が難しそうである様子が見られていた。しかし、言葉だけでは想像が難しい内容もICT機器を活用しながら活動を進めることで、言葉では伝えにくい様々な情報を伝えることができた。

内容についても、身近のものや、児童生徒が興味関心のあるものを活用することで、活動に対する興味を引き出すことができた。過去に流行したものや、保護者の年代では当たり前だったものを提示することで、保護者にとっては懐かしさ、児童生徒にとっては目新しさを感じ、児童生徒らは驚きと興味をもって活動に参加していた。そのことはアンケート結果からもミニ集会の内容について肯定的意見の割合が非常に多いことから分かる。

10年後の未来について考えるワークシートでは、10年後という身近な未来のことを考えたため、今後現実的にできそうなものや機器が進化したものなどを想像していることが見取れた。このことから自分たちにとって不幸な未来でなく、希望をもった未来の想像し、未来の社会に参画しようとしていたことが分かる。一部、児童生徒の中で「未来のことについて考えてワクワクしたし、少し怖いなどと思った」「もう進化する必要がない」という意見などがあつた。希望だけでなく、そのような意見があつたということは、活動内容について入り込み主体的に考えていたと言える。

視点2について

保護者、児童、生徒が一体となり行うミニ集会で、主体的で対話的な学びを通し、様々な意見を共有することで、情報のモラル（意欲）が芽生え、「望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度」を培っていたか

ミニ集会では小学生、中学生、教員、保護者らが意見を出し合い、様々な意見を共有する活動ができた。その中で、未来のことを児童生徒は自身のこととしてとらえ、主体的に考える様子が見られていた。未来への希望を描く情報のモラル（意欲）が芽生えたかという点では、事後アンケートから、今回のミニ集会『「これからの未来について考えてみよう」～ソサエティ5.0の時代を生き抜くために～』の企画によって、未来について考えられたという回答が多く記述されていた。また、「これからがんばりたい」「未来が楽しみ」等の前向きな回答も多数見られていることから、児童生徒の中で情報モラル（意欲）が芽生え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度が培えたと考えられる。

また、アンケートの回答から、小学生と中学生が一緒に行事や授業を行うことについて肯定的な意見が多く、活動については「小学生、中学生、大人が集まり話し合いすることはめったにないことで、楽しかった」といった意見などを述べている児童生徒もいることから、児童生徒の意見からも小中連携をニーズとしているということが分かった。

(3) まとめ

以上の視点1と視点2から、連携教育を活かしたミニ集会「これからの未来について考えてみよう」の活動実践は、本主題「情報社会に参画する態度」の育成の一助となったと考えられる。

7. 成果 (○) と課題 (▲)

- 児童生徒のアンケートや意見から、肯定的な回答が多く見られ、「楽しかった」「未来が楽しみになった」という回答が見られた。活動中も活発に意見が出ており、児童、生徒、保護者が未来について意見交換することができた。
 - 内容については、保護者世代や子供の世代で流行っていたものを相互に見せることで、共感をもったり世代間の差を感じたりする内容ができた。
 - これまでに様々な連携教育を進めてきた経験から、企画を立てる段階においてもスムーズな話し合いをもつことができた。PTA会長も含め、様々な方から意見をもらい活動内容を作り上げることで、どのような世代にも受け入れてもらえる活動ができた。
 - 小学校と中学校とPTA会長と協力し、活動案を作成することで、小学校目線からの見通し、中学校目線からの見通し、保護者目線からの見通しに若干の違いがあることが分かった。それぞれの考えをもとに、どのような活動をしたらよいかということを共同で考えることができたことは、地域全体に向けて作成した活動として意義があった。
 - 情報・視聴覚は、情報についてだけではなく、視聴覚も担っているということ、提案内容を企画する以前から小学校と中学校で話し合ってきた。そこで今回行ったミニ集会においては、特に視聴覚にこだわって児童生徒に理解しやすい内容を意識し制作したり、積極的にICT機器を活用したりしたことにより、多くの児童生徒が課題を自分のこととしてとらえ、主体的に考えることができた。
 - 大きな会場で児童生徒だけでなく、保護者や地域の方など様々な方が参加されることを想定し、マイクで伝えるだけでなく、活動で発言した言葉を文字起こしして、聞き漏らしや、聞こえづらさなどが少なくなるよう、前面のスクリーンに提示した。ユニバーサルデザイン的な配慮をすることにより、全体で未来について考えられることができるよう工夫を行った。
- ▲連携教育を行っているとはいえ、連携して活動を行うということは、時間の調整や話し合い、活動の作成などの労力が必要となる。準備期間もかかることから、働き方改革が推進されている現在では、簡素化や効率を求める必要がある。
- ▲実施時間の都合上、中学生と小学生の混合グループにしての活動は行わなかった。児童生徒の意見からも、小学生と中学生の混合グループでの活動でもよかったという意見があった。混合にしたほうがより連携が深まったと考えられる。その場合、中学生の意見が優位に立つのではないかと疑問がある。
- ▲保護者、地域の方々も対象としたが、参加の割合は非常に少なかった。今後、地域を含めた活動を進める場合、日時の設定や周知の仕方の検討が必要であると考えられる。
- ▲連携教育の延長で行った活動のため、対象が小学6年生と中学2年生であったが、その他の学年も対象にしても可能と考える。
- ▲情報モラルの内容も必要であることから、単発で行うものではなく、年間を通じた単元として行う必要性を感じた。

7. おわりに

副題における連携教育について、八街市では14年間様々な工夫を行い取り組んできている。また、八街市では幼保小中高連携としていることから、小学校だけでなく幼稚園、保育園、高校とのつながりも深い。

今回、行ったミニ集会「これからの未来について考えてみよう」については、連携教育の一環として取り上げた。小中連携はミニ集会だけでなく、前年度のミニ集会、ブリッジ授業（小中の教員が交換で行う授業）や小学校のPTA夏休み行事の中学生のボランティア参加、小学生の授業参観、中学校生徒会による学校紹介や部活動紹介、あいさつ運動の共同参加、特別支援学級の交流など、その他ここでは紹介しきれないほど様々な活動を行った上で、今回のミニ集会へと繋がっている。

さらに、小学校と幼稚園や保育園の交流では、幼児の運動会の参加、小学校見学、交流会などを開いている。幼稚園と保育園の先生からのビデオメッセージなどを受け取り、小学校1年生自身の成長を感じるような授業実践も行った。また、中学校においても、幼稚園、保育園への実習（家庭科）や高校との交流なども行っている。

今回のミニ集会の他に情報視聴覚担当として、幼稚園と保育園に小学校の紹介ビデオを制作、学区の幼稚園保育園に配布し、職員へのアンケートも実施している。

台風による災害、今回の地域ミニ集会後に起こった新型コロナウイルスによる休校措置などにより、研究の停止、連携教育の延期や中止が余儀なくされ、連携教育の行い方についても変化が見られた。本研究で行ったミニ集会後、小学校6年児童が中学校へ進学した経過を追うことができなくなってしまったことも残念であった。

令和3年度を迎え、コロナ禍において今後どのように連携教育ができるのかについて小学校と中学校で話し合っている。形を変えつつも、工夫をしながら連携教育を進めていくことを共通理解した。さらには、GIGAスクール構想を前に、以前よりICT機器を活用した交流の環境が整備されていることから、情報・視聴覚教育が担うべきことも多くなっている。

児童生徒が未来への希望を見だし、そこからより良い情報社会にしていくためには、皆がどのような行動をとれば幸せな情報社会が訪れるのかを一人ひとりが考え、意欲（モラル）をもち行動すること、そのような態度が「情報社会に参画する態度」といえるのではないかと考える。今後も小学校と中学校共に協力し、一層充実した情報教育を行っていきたい。